

金ロイオン聖体礼儀（輔祭なし）

【 重聯禱 】

司祭) われらみなたましい まつと い われら おもい まつと い
我等皆 靈 を全 うして曰わん、我等の 思 を全 うして曰わん、



司祭) しゅぜんのうしや わ れつそ かみ なんぢ いの き い あわれ
主 全 能 者、吾が列祖の神よ、爾 に禱る 聆き納れて 憐 めよ、



司祭) かみ なんぢ おおい あわれみ よ われら あわれ なんぢ いの き い あわれ
神よ、爾 の大なる 憐 に因りて我等を 憐 めよ、爾 に禱る、聆き納れて 憐 めよ、



司祭) またわ くに てんのうおよ くに つかさど もの ため いの
又我が國の天皇及び國を 司 る者の爲に禱る、



司祭) またきょうかい つかさど そんき われら ぜんにつぼん ふしゅきょう およ
又 教 會を 司 る尊貴なる我等の全日本の府主教セラフィム、及びハリストスに

お ことごと われら けいてい ため いの
於ける 悉 くの我等の兄弟の爲に禱る、

しゅ あ わ れ め、しゅ あ わ れ め、しゅ あ わ れ め よ 。
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) またわれら けいてい しょしさい しょしゅうどうしさい およ お われら しゅうけいてい
又我等の兄弟、諸司祭、諸 修 道司祭、及びハリストスに於ける我等の衆 兄弟

ため いの
の爲に禱る、

しゅ あ わ れ め、しゅ あ わ れ め、しゅ あ わ れ め よ 。
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) またつね きおく ふく しせい せいきょう パトリアルフ せいどう こんりゅうしゃ およ
又恒に記憶せらるる、福たる至聖なる正 教の総主教、この聖堂の建 立者、及

び已に寝りし 悉 くの父祖兄弟、此の 處と諸方とに 葬られたる正 教の者の爲

いの
に禱る、

しゅ あ わ れ め、しゅ あ わ れ め、しゅ あ わ れ め よ 。
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) またこ しそん せいどう もの たてまつ ぜんぎょう おこな これ ろう これ うた およ
又此の至尊なる聖堂に物を 獻り、善業を行い、之に勞し、之に歌い、及び

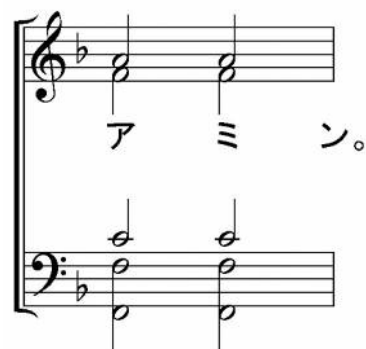
ここに立ちて爾の大にして 豊なる 憐を仰ぎ望む者の爲に禱る、

しゅ あ わ れ め、しゅ あ わ れ め、しゅ あ わ れ め よ 。
主 憐 主 憐 主 憐

(※ 特別な災害や特別な感謝がある時、重聯禱にその旨追加する場合があります。その場合も「主憐め、主憐め、主憐めよ。」と応えて歌う。)

司祭) (黙誦：主我が神よ、爾の諸僕より此の熱切の祈禱を受け、爾が憐の多きに
 よ われら あわれ なんぢ めぐみ われら およ なんぢ ゆたか あわれみ あお
 因りて我等を憐み、爾の恵を我等と凡そ爾の豊なる憐を仰ぐ
 なんぢ たみ つかわ たま
 爾の民に遣し給え、)

司祭) 蓋爾は慈憐にして人を愛する神なり、我等光榮を爾父と子と聖神に獻ず、今
 いつ よよ
 も何時も世世に、



【 啓蒙者の聯禱 】

司祭) 啓蒙者よ、主に禱るべし、



司祭) 信者よ、啓蒙者の爲に禱らん、願くは主は彼等に憐を垂れん、



司祭) 眞實の言を以て彼等を啓蒙せん、

しゅ あわれ め よ。
主 憐

司祭) ^{ぎ ふくいんけい かれら ひら} 義の福音經を彼等に啓かん、

しゅ あわれ め よ。
主 憐

司祭) ^{かれら そのせい こう した きょうかい いつ} 彼等を其聖・公・使徒の教會に一にせん、

しゅ あわれ め よ。
主 憐

司祭) ^{かみ なんぢ おんちよう もつ かれら すく あわれ たす まも} 神よ、爾の恩寵を以て、彼等を救い憐み佑け護れよ、

しゅ あわれ め よ。
主 憐

司祭) ^{けいもうしゃ なんぢら こうべ しゅ かが} 啓蒙者よ、爾等の首を主に屈めよ、



司祭) (黙誦： ^{しゅわ かみ たか お ひく のぞ なんぢ どくせいし かみ わ しゅ} 主我が神、高きに居り卑きを臨み、爾の獨生子・神・我が主イイススハ
^{つかわ にんげん すくい もの なんぢ ぼく けいもうしゃ そのこうべ} リストスを遣して人間の救となしし者よ、爾の僕・啓蒙者・其首を
^{なんぢ かが もの かえり とき したが かれら ふくせい よくばん しょざい ゆるし} 爾に屈めし者を顧み、時に随いて、彼等に復生の浴盤、諸罪の赦、
^{ふきゆう ころも たま かれら なんぢ せい こう すと きょうかい いつ かれら なんぢ} 不朽の衣を賜い、彼等を爾が聖・公・使徒の教會に一にし、彼等を爾
^{えら むれ あわ たま} の選ばれたる群に合せ給え、)

司祭) ^{ねがわ かれら われら とも なんぢちち こ せいしん しそんしえい な さんよう いま い} 願くは彼等も我等と偕に、爾父と子と聖神の至尊至榮の名を讃揚せん、今も何
^{つ よよ} 時も世に、



【 信者の聯禱 1 】

司祭) ^{しゅうけいもうしゃい けいもうしゃい しゅうけいもうしゃい けいもうしゃひとり ただしん} 衆啓蒙者出でよ、啓蒙者出でよ、衆啓蒙者出でよ、啓蒙者一人もなく、唯信
^{じゃまたまたあんわ しゅ いの} 者復又安和にして主に禱らん、



司祭) ^{かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも} 神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、



司祭) ^{えいち} 睿智、

司祭) (黙誦: ^{しゅ ぼんぐん かみ なんぢ われら いま なんぢ せい さいだん まえ た なんぢ} 主、萬軍の神や、爾が我等に、今も爾の聖なる祭壇の前に立ち、爾
^{じれん ふふく われら つみ しゅうじん あやまち ため きとう ゆる たま} の慈憐に俯伏し、我等の罪と衆人の過との爲に祈禱するを赦し給いし
^{なんぢ かんしゃ かみ われら いのり い われら なんぢ しゅうじん ため なんぢ} を爾に感謝す、神よ、我等の禱を納れ、我等を爾が衆人の爲に、爾
^{いのり ねがい むけつ まつり けん た もの たま われらなんぢ せい} に祈と願と無血の祭とを獻ずるに勝る者となし給え、我等爾が聖
^{しん ちから こ なんぢ ほうじ ため た もの ていざい つまづき そのりよう} 神の力にて此の爾の奉事の爲に立てし者を、定罪なく、躓なく、其良
^{しん いさぎよ しょう もつ いづれ ときいづれ ところ なんぢ よ かな もの} 心の潔き證を以て、何の時何の處にも爾を籲ぶに適う者となし
^{なんぢわれら き なんぢ あいれん おお よ われら ため じんじ もの} て、爾我等に聴き、爾が哀憐の多きに依りて、我等の爲に仁慈の者とな
^{いた} るを致せ、)

司祭) ^{けだしおよ こうえいそんきふくはい なんぢちち こ せいしん き いま いつ よよ} 蓋凡そ光榮尊貴伏拜は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、



【 信者の聯禱2 】

司祭) ^{われらまたまたあんわ しゅ いの} 我等復又安和にして主に禱らん、



司祭) ^{かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも} 神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、



司祭) ^{えいち} 睿智、

司祭) (黙誦: ^{ぜん ひと あい しゅ われらまたかつしぼしぼなんぢ ふふく なんぢ いの われ} 善にして人を愛する主や、我等復且数爾に俯伏し、爾に禱る、我
^{ら いのり かえり われら たましい からだ およ にくたい れいしん けがれ} 等の禱を顧みて、我等の靈と體とを凡そ肉體と靈神との穢より
^{いさぎよ われら きず ていざい なんぢ せい さいだん まえ た たま} 潔くし、我等に、玷なく、定罪なく、爾の聖なる祭壇の前に立つを賜え、
^{かみ われら とも きとう もの いのち しん ぞくしん ちしき しんぽ あた} 神や、我等と偕に祈禱する者にも、生命と信と屬神の智識との進歩を與え
^{たま かれら つね おそれ あい もつ なんぢ つと きず ていざい なんぢ} 給え、彼等が常に畏と愛とを以て爾に務めて、玷なく、定罪なく、爾
^{せいきみつ う なんぢ てんごく い た もの え たま} の聖機密を領け、爾の天國に入るに勝る者となるを得せしめ給え、)

司祭) ^{われらつね なんぢ けんぺい もと まも こうえい なんぢちち こ せいしん けん ため} 我等常に爾が權柄の下に護られて、光榮を爾父と子と聖神に獻ずるが爲なり、
^{いま いっ よよ} 今も何時も世世に、



【 ヘルヴィムの歌 】

わ 我 れ 等 ら つ 慎 つ し ん で ヘ ル ヴィ ム に の っ と
則

り ヘ ル ヴィ ム に の っ と り
則

せ い さ ん の う た を い の ち を ほ 施 ど
聖 三 歌 生 命 施

こ す の せ い さ ん し ゃ に た て ま つ り
聖 三 者 献

て

こ の よ の つ と め を し り ぞ く べ 可 し
世 の 勤 退 ぞ 可



司祭) (黙誦：肉體の慾と快樂とに縛られし者は、一も爾光榮の王に來り、或は

ちか あるい ほうじ るた けだしなんぢ ほうじ てんぐん ため おおい
近づき、或は奉事するに堪うるなし、蓋爾に奉事するは、天軍の爲にも大

おそ しか なんぢ い がた はか がた なんぢ じんあい よ ほん
にして畏るべきなり、然れども爾は言い難く量り難き爾の仁愛に因りて、本

せい か うしな ひと われら ため アルヒエレイ またばんゆう しゅさい
性を易えず失わずして人となり、我等の爲に司祭首となり、又萬有の主宰

よ われら こ ほうじ むけつさい せいじ つた たま けだししゅわ かみ
なるに縁りて、我等に此の奉事の無血祭の聖事を傳え給えり、蓋主我が神や、

なんぢ ひとりてんち こと さいり なんぢ ほうぎ にな もの
爾は獨天地の事を宰理す、爾はヘルヴィムの寶座に荷わるる者、セラフィ

しゅ おう ひとりせい せいしゃ うち いこ もの ゆえ われなんぢ
ムの主、イズライリの王、獨聖にして聖者の中に息う者なり、故に我爾

ひとりぜん よ い もの いの われつみ た なんぢ ぼく かえり わ
獨善にして善く納るる者に禱る、我罪ありて堪えざる爾の僕を顧み、我が

たましい ころよ こころ よこしま しりよ きよ われしんびん おんちよう こうむ もの
靈と心とを邪なる思慮より淨め、我神品の恩寵を被れる者を、

なんぢ せいしん ちから よ こ なんぢ せい しょくあん まえ た なんぢ しじよう
爾が聖神の力に藉りて、此の爾の聖なる食案の前に立ち、爾が至淨

せいたいしそん せいけつ きみつ おこな た もの たま けだしわれこうべ
なる聖體至尊なる聖血の機密を行ふに堪うる者となし給え、蓋我首を

かが なんぢ つ なんぢ いの なんぢ かんばせ われ さ なか われ なんぢ ぼく
屈めて爾に就き、爾に禱る、爾の顔を我より避くる勿れ、我を爾が僕

しゅう うち しりぞ なか すなわちわれつみあ あた なんぢ ぼく こ さいもつ
衆の中より却くる勿れ、乃我罪有りて當らざる爾の僕に此の祭物を

ささ いた たま けだし わ かみ なんぢ けん もの けん もの
獻ぐるを致させ給え、蓋ハリストス我が神よ、爾は獻ずる者と獻ぜらるる者、

う もの わか もの われらこうえい なんぢ なんぢ むげん ちち しせいしぜん
受くる者と頌たる者なり、我等光榮を爾と爾の無原の父と至聖至善に

いのち ほどこ なんぢ しん けん いま いつ よよ
して生命を施す爾の神とに獻ず、今も何時も世に、)

司祭) (黙誦：我等奧密にしてヘルヴィムを像り、聖三の歌を生命を施す三者に歌い、

いまこ よ おもんばかり ことごと しりぞ べ てんし ぐん み にな たてまつ ばん
今此の世の慮を悉く退く可し、天使の軍の見えずして荷い奉る萬

ゆう おう いただ よ
有の王を戴かんとするに縁る、アイルイヤ、アイルイヤ、アイルイヤ。

われらおうみつ かたど せいさん うた いのち ほどこ さんしゃ うた
我等奧密にしてヘルヴィムを像り、聖三の歌を生命を施す三者に歌い、

いまこ よ おもんばかり ことごと しりぞ べ てんし ぐん み にな たてまつ ぼん
今此の世の 慮 を 悉 く 退 く可し、天使の軍の見えずして荷い 奉 る萬

ゆう おう いただ よ
有の王を 戴 かんとするに縁る、ア ril イヤ、ア ril イヤ、ア ril イヤ。

われらおうみつ かたど せいさん うた いのち ほどこ さんしゃ うた
我等奥密にしてヘルヴィムを 像 り、聖三の歌を生命を 施 す三者に歌い、

いまこ よ おもんばかり ことごと しりぞ べ てんし ぐん み にな たてまつ ぼん
今此の世の 慮 を 悉 く 退 く可し、天使の軍の見えずして荷い 奉 る萬

ゆう おう いただ よ
有の王を 戴 かんとするに縁る、ア ril イヤ、ア ril イヤ、ア ril イヤ。)

【 大聖入 】

司祭) ねがわ しゅ かみ そのくに おい わ くに てんのうおよ くに つかさど もの つね きおく
願 くは主・神は其國に於て、我が國の天皇及び國を 司 る者を恒に記憶せん、

いま いつ よよ
今も何時も世に、

ねがわ しゅ かみ そのくに おい きょうかい つかさど せんき われら ぜんにつぼん ふしゅきょう
願 くは主・神は其國に於て、教會を 司 る尊貴なる我等の全日本の府主 教

つね きおく いま いつ よよ
セラフィムを恒に記憶せん、今も何時も世に、

ねがわ しゅ かみ そのくに おい すで ねむ ふしゅきょう ふしゅきょう ふ
願 くは主・神は其國に於て、已に寢りし府主 教 セルギイ、府主 教 イリネイ、府

しゅきょう ふしゅきょう ふしゅきょう だいしゅきょう しゅ
主 教 ウラディミル、府主 教 フェオドシイ、府主 教 ダニイル、大主 教 ニコライ、主

きょう しゅきょう およ こと きおく われら すで ねむ かぞく
教 ニコライ、主 教 ペトル、(及び殊に記憶せらるる 某) 我等の已に寢りし家族、

けいていしまい もろもろ えんしゃ ほうゆうら つね きおく いま いつ よよ
兄 弟 姉 妹、 諸 の縁者、朋友等を恒に記憶せん、今も何時も世に、

ねがわ しゅ かみ そのくに おい なんぢしゅうせいきょう ら つね きおく
願 くは主・神は其國に於て、爾 衆 正 教 のハリストティアニン等を恒に記憶せん、

いま いつ よよ
今も何時も世に、



つ る ばんぶつ つかさをい ただけば なり
 萬物 宰 戴

ア リル イ ヤ ア リル イ ヤ ア リル イ ヤ ア

リ ル イ ヤ

司祭) (黙誦: ^{とうと}尊 ^{なんぢ}きイオシフは ^{いさぎよ}爾 の ^み潔 ^き身を木より下し、^{おろ}淨 ^{きよ}き布に裹み、^{ぬの}香 ^{つつ}料にて ^{こうりょう}

^{おお}覆い、^{あらた}新 ^{はか}なる墓に藏めり、^{おさ}

ハリストスよ、^{なんぢ}爾 は ^{かみ}神なるにより、^{からだ}體 ^{はか}にて墓に在り、^あ靈 ^{たましい}にて地獄に在り、^{ぢごく}あ

^{うとう}右盜と ^{とも}偕に ^{てんどう}天堂に在り、^あ父と ^{せいしん}聖神と ^{とも}共に ^{ほうざ}寶座に在り、^あ限 ^{かぎり}なき者として ^{いつ}一

^{さい}切を ^み満て ^{たま}給えり、

ハリストスよ、^わ我が ^{ふかつ}復活の ^{いづみ}泉たる ^{なんぢ}爾 の ^{はか}墓は、^{いのち}生命を ^{ほどこ}施す者、^{もの}地堂より ^{ちどう}

^{うるわ}美 ^{もの}しき者、^{じつ}実に ^{いか}如何なる ^{おう}王の ^{みや}宮よりも ^{かがや}耀ける者と ^{もの}顯れたり、^{あらわ}

^{とうと}尊 ^{なんぢ}きイオシフは ^{いさぎよ}爾 の ^み潔 ^き身を木より下し、^{おろ}淨 ^{きよ}き布に裹み、^{ぬの}香 ^{つつ}料にて ^{こうりょう}

^{おお}覆い、^{あらた}新 ^{はか}なる墓に藏めり、^{おさ}

^{しゅ}主よ、^{なんぢ}爾 の ^{めぐみ}恵に ^よ因りて ^{おん}恩を ^たシオンに ^{じょうえん}垂れ、^たイエルサリムの ^た城 ^{たま}垣を ^{たま}建て給

^{そのとき}え、^{なんぢぎ}其時に ^{まつり}爾義の ^{ささげもの}祭、^{やきまつり}獻物と ^{よろこ}燔祭を ^う喜び ^{そのとき}饗けん、^{ひとびと}其時に ^{なんぢ}人人 ^{なんぢ}爾

^{さいだん}の祭壇に ^{こうし}犢 ^{そな}を奠えんとす、)

【 増聯禱 】

われらしゅ まえ わ いのり ま くわ
 司祭) 我等主の前に吾が 禱 を増し加えん、

さき とうと さいひん ため しゅ いの
 司祭) 獻げたる 尊 き祭品の爲に主に禱らん、

こ せいどう およ しん つつしみ かみ おそ こころ もつ ここ きた もの ため しゅ いの
 司祭) 此の聖堂、及び信と 慎 と神を畏るる 心 とを以て此に来る者の爲に主に禱らん、

われらもろもろ うれい いかり あやうき まぬか ため しゅ いの
 司祭) 我等 諸 の憂愁と忿怒と危難とを 免 るるが爲に主に禱らん、

司祭) ^{かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも}
 神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、



司祭) ^{こ ひ じゅんぜん せいせい へいあん むざい しゅ もと}
 此の日の純全・成聖・平安・無罪ならんことを主に求む、



司祭) ^{へいあん てんし ただ きょうどうし わ れいたい しゅごしゃ たま しゅ もと}
 平安の天使、正しき教導師、吾が靈體の守護者を賜わんことを主に求む、



司祭) ^{われら つみ あやまち なだ ゆる しゅ もと}
 我等の罪と過とを宥め赦さんことを主に求む、



司祭) ^{われら たましい ぜん えき こと およ せかい へいあん たま しゅ もと}
 我等の靈に善にして益ある事、及び世界に平安を賜わんことを主に求む、



司祭) われら いのち よじつ へいあん つうかい もつ おわ しゆ もと
我等の生命の餘日を平安と痛悔とを以て終らんことを主に求む、



司祭) われら いのち おわり かな やまい はぢ へいあん およ
我等の生命の終がハリストティアニンに適い、疾なく、耻なく、平安なること、及び
ハリストスの畏るべき審判に於て宜しき對をなすを賜わんことを求む、



司祭) しせいしけつ いた さんび われら こうえい ぢよさい しょうしんぢよ えいていどうぢよ
至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰・生神女・永貞童女マリヤ
と、諸聖人とを記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉く
われら いのち もつ かみ いたく
の我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん、



司祭) (黙誦: ^{しゅ かみ ぜんのうしや ひとりせい}主・神・全能者、^{こころ つく なんぢ よ もの さんび まつり}獨聖にして心を盡して爾を籲ぶ者より讚美の祭

^{う もの われら さいにん いのり う なんぢ せい さいだん たづさ われら}
 を受くる者よ、我等罪人の禱をも受けて爾の聖なる祭壇に携え、我等を、

^{わ つみ しゅうじん あやまち ため なんぢ ささげもの ぞくしん まつり けん}
 我が罪と衆人の過との爲に、爾に獻物と屬神の祭とを獻ずるに

^{た もの たま われら なんぢ まえ おんちよう え われら まつり}
 勝うる者となし給え、我等に爾の前に恩寵を得せしめて、我等の祭は

^{なんぢ よ い もの なんぢ おんちよう ぜんしん のぞ われら うち こ}
 爾に善く納れらる者となり、爾が恩寵の善神は臨みて、我等の中と此の

^{そな さいひん なんぢ しゅうじん お いた たま}
 供えられたる祭品と爾の衆人と共に居るを致させ給え、)

司祭) ^{なんぢ ぞくせいし じれん よ なんぢ かれ しせいしぜん いのち ほどこ なんぢ しん}爾の獨生子の慈憐に因りてなり、爾は彼と至聖至善にして生命を施す爾の神

^{とも あが ほ いま いつ よよ}
 と偕に崇め讃めらる、今も何時も世世に、



【 ニケア・コンスタンチヌーポリ全地公会にて採択されし信經 】

司祭) ^{しゅうじん へいあん}衆人に平安、



司祭) ^{われらたがい あいあい どうしん う みと ため}我等互に相愛すべし、同心にして承け認めんが爲なり、



かれざるせいさんしやを

司祭) (黙誦：主^{しゅわれ}の力^{ちから}よ、我^{われ}爾^{なんぢ}を愛^{あい}せん、主^{しゅ}は我^{われ}の防^{かため}固^{われ}、我^{われ}の避^{かくれが}所^{しゅわれ}なり、主^{しゅ}の
 力^{ちから}よ、我^{われ}爾^{なんぢ}を愛^{あい}せん、主^{しゅ}は我^{われ}の防^{かため}固^{われ}、我^{われ}の避^{かくれが}所^{しゅわれ}なり、主^{しゅ}の力^{ちから}よ、我^{われ}
 爾^{なんぢ}を愛^{あい}せん、主^{しゅ}は我^{われ}の防^{かため}固^{われ}、我^{われ}の避^{かくれが}所^{しゅわれ}なり、)

司祭) 門^{もん}、門^{もん}、敬^{つつし}みて聽^きくべし、

われしんず、ひとつのかみちちぜんのうしや、てん
 我 信 一 神 父 全 能 者 天

とち、みゆるとみえざるばんぶつをつくりし
 地 見 見 萬 物 造

しゅを、またしんず、ひとつのしゅイイスハリストス
 主 又 信 一 主

かみのどくせいの子、よろづよのさきに
 神 獨 生 子 萬 世 前

ちちよりうまれ、ひかりよりのひかり、まこ
 父 生 光 光 眞

とのかみよりのまことのかみ、うまれし
 神 眞 神 生

ものにてつくられしにあらざ、ちちといっ
 者 造 非 父 一

たいにしてばんぶつかれにつくられ、われ
 體 萬 物 彼 造 我

らひとびとのため、またわれらのすくいのため
 等 人 人 の 爲 又 我 等 の 救 い の 爲
 めにてんよりくだり、せいしんおよびどうて
 天 降 聖 神 及 童 貞
 いぢよマリヤよりみをとりにひととなり、わ我
 女 身 取 人 とな り、 わ 我
 れらのためにポンティピラトのときじゅうじかに
 等 爲 の 時 十 字
 くぎうたれ、くるしみをうけほうむら
 釘 苦 受 葬
 れ、だいさんじつにせいしょにかないてふく
 第 三 日 聖 書 應 復
 かつし、てんにのぼり、ちちのみぎにざ
 活 天 升 父 右 坐
 しこうえいをあらわしていけるものとしせ
 光 榮 を 顯 生 者 と し 死
 しものとしをしんぱんするためにまたきたり、
 者 と し 審 判 の 爲 に 還 來 たり、
 そのくにおわりなからんを、またしんず、せい
 其 國 終 又 信 聖
 いしんしゅいのちをほどこすものちちよりい出
 神 主 生 の 命 を 施 者 の 父 ち ち よ り い 出
 で、ちちおよびことともにおがまれほめら
 父 及 子 共 拜 が ま れ ほ め ら

れ、よげんしゃをもつてかつていいしを、また
 預言者以嘗言又

しんず、ひとつのせいなるおおやけなるしとの
 信一聖公使徒

きょうかいを、われみとむ、ひとつのせんれ
 教會我認一洗禮

い、もつてつみのゆるしをうるを、われの望
 以罪赦得我望

ぞむししゃのふくかつ、ならびにらいせい
 死者復活並來世

のいのちを、アミン。
 生命

【 アナフォラ 】

司祭) ^{ただ}正しく立ち、^た畏れて立ち、^{おそ}敬みて^た安和にして^{つつし}聖なる^{あんわ}獻物を^{せい}奉らん、^{ささげもの}^{たてまつ}

へい 和 の あ わ れ み さん よ う の ま つ り
 平 和 の あ わ れ み さん よ う の ま つ り

を。

司祭) ^{ねがわ}願くは^わ我が^{しゅ}主イイススハリストスの^{めぐみ}恩、^{かみちち}神父の^{いつくしみ}慈、^{せいしん}聖神の^{したしみ}親は、^{なんぢしゅう}爾衆

^{じん}人と^{とも}偕に^あ在らんことを、

なんぢのしんとも

司祭) ^{こころうえ むか} 心上に向うべし、

しゅにむかえり

司祭) ^{しゅ かんしゃ} 主に感謝すべし、

ちちとこいとせいしん、いつたいにしてわ分

かれざるさんしゃにふしおがむはとうぜんに

してぎなり。

司祭) (黙誦: ^{なんぢ かしょう なんぢ さんよう なんぢ さんび なんぢ かんしゃ なんぢ いつさい} 爾を歌頌し、爾を讚揚し、爾を讚美し、爾に感謝し、爾が一切

^{おき ところ おい なんぢ ふ おが とうぜん ぎ けだしなんぢ なんぢ ぞく} 治むる處に於て爾に伏し拜むは當然にして義なり、蓋爾と爾の獨



司祭) (黙誦: ^{ひと あい しゅさい われら こ ふく ぐん とも よ い せい かな し}人を愛する主宰よ、我等も此の福たる軍と偕に籲びて曰う、聖なる哉、至

^{せい かな なんぢ なんぢ どくせいし なんぢ せいしん せい かな しせい かな なんぢ}聖なる哉、爾と爾の獨生子と爾の聖神、聖なる哉、至聖なる哉、爾

^{こうえい いげん なんぢ なんぢ せかい あい なんぢ どくせいし たま いた}の光榮は威嚴なり、爾は爾の世界を愛して、爾の獨生子を賜うに至り、

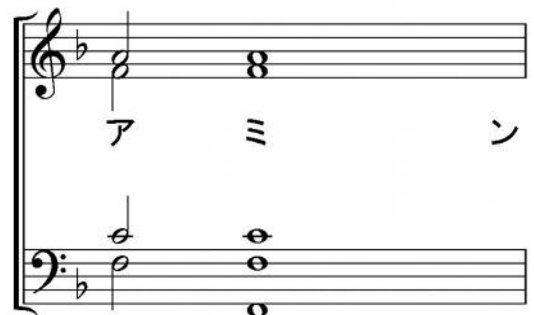
^{およ これ しん もの ちんりん まぬか えいせい え かけきた およ われら}凡そ之を信ずる者に沈淪を免れて永生を得せしむ、彼來りて、凡そ我等

^{お ていせい せいぜん わた よ ただ い みづか おのれ せかい いのち}に於ける定制を成全し、付されし夜、正しく言えば親ら己を世界の生命の

^{ため わた よ そのせい しじょうむてん て へい と かんしゃ しゅくさん}爲に付しし夜、其聖にして至淨無玷なる手に餅を取り、感謝し、祝讚し、

^{せいせい さ そのせい もんとおよ しと あた い}成聖し、擘きて其聖なる門徒及び使徒に予えて曰えり、)

司祭) ^{と くら これわ たい なんぢら ため さ もの つみ ゆるし え いた}取りて食え、是我が體、爾等の爲に擘かるる者、罪の赦を得るを致す、



司祭) (黙誦: ^{おなじ ばんさん のち しゃく と いわ}同く晩餐の後に爵を執りて曰く、)

司祭) ^{みなこれ の これわれ しんやく ち なんぢらおよ おお ひと ため なが もの つみ ゆるし}皆之を飲め、是我の新約の血、爾等及び衆くの人爲に流さるる者、罪の赦

^{え いた}を得るを致す、



司祭) (黙誦: 故に我等此の救を施す誠、及び凡そ我等の爲に有りし事、即十
 じか はか だいさんじつ ふくかつ てん のぼ こと みぎ ざ こと こうえい さいど
 字架、墓、第三日の復活、天に升る事、右に坐する事、光榮なる再度の
 こうりん きおく
 降臨を記憶して、)

司祭) なんぢ たまもの なんぢ しょぼく しゅう ためいつさい ため なんぢ たてまつ
 爾の賜を、爾の諸僕より、衆の爲一切の爲に爾に獻りて、



司祭) (黙誦: 我等復爾に此の靈智なる無血の奉事を獻じて、願ひ祈り切に求む、爾
 われらまたなんぢ これいち むけつ ほうじ けん ねが いの せつ もと なんぢ
 我等復爾に此の靈智なる無血の奉事を獻じて、願ひ祈り切に求む、爾

せいしん われらおよ こ そな さいひん つかわ たま
の聖神を我等及び此の奠えたる祭品に遣し給え、)

司祭) (黙誦: だいさんじ なんぢ しせいしん なんぢ しと つか しぜん しゅ これ われら と
と
あ なか なおわれらなんぢ いの もの うち これ あらた かみ いさぎよ
り上ぐること勿れ、尚我等爾に祈る者の衷に之を新にせよ、神よ、潔

こころ われ つく ただ たましい われ うち あらた たま
き心を我に造り、正しき靈を私の衷に改め給え、

だいさんじ なんぢ しせいしん なんぢ しと つか しぜん しゅ これ われら
第三時に爾の至聖神を爾の使徒に遣わしし至善の主よ、之を我等より
と あ なか なおわれらなんぢ いの もの うち これ あらた われ なんぢ
取り上ぐること勿れ、尚我等爾に祈る者の衷に之を新にせよ、我を爾の
かんばせ お なか なんぢ せいしん われ と あ なか
顔より逐うこと勿れ、爾の聖神を我より取り上ぐること勿れ、

だいさんじ なんぢ しせいしん なんぢ しと つか しぜん しゅ これ われら
第三時に爾の至聖神を爾の使徒に遣わしし至善の主よ、之を我等より
と あ なか なおわれらなんぢ いの もの うち これ あらた
取り上ぐること勿れ、尚我等爾に祈る者の衷に之を新にせよ、)

司祭) こ へい もつ なんぢ そんたい な
此の餅を將て、爾のハリストスの尊體と成し、アミン。

こ しゃくちゆう もの もつ なんぢ そんけつ な
此の爵中の者を將て、爾のハリストスの尊血と成し、アミン。

なんぢ せいしん もつ これ へんか
爾の聖神を以て之を變化せよ、アミン。アミン。アミン。

(黙誦: ねがわ これ う もの ため たましい けいせい しょざい ゆるし なんぢ
願くは此は領くる者の爲に、靈の警醒となり、諸罪の赦となり、爾

せいしん たいごう てんごく え なんぢ お ゆうかん しんあん
が聖神の體合となり、天國を得ることとなり、爾に於ける勇敢となり、審案

あるい ていざい
或は定罪とならざらんことを、

また れいち ほうじ しん もつ ねむ げんそ れつそ たいそ よげんしゃ しと
又この靈智なる奉事を、信を以て寢りし元祖・列祖・太祖・預言者・使徒・

でんどうしゃ ふくいんしゃ ちめいしゃ ひょうしんしゃ せつせいしゃ およ およ しん もつ おわ
傳道者・福音者・致命者・表信者・節制者、及び凡そ信を以て終

ぎ たましい ため なんぢ けん
りし義なる靈の爲に爾に獻ず、)

司祭) こと しせいしけつ いた さんび われら こうえい ちよさい しょうしんぢよ えいていどうぢよ
特に至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰・生神女・永貞童女マ

ため
リヤの爲、

【 常に福 】 ※祭日に他の ^{ザダストイニク}「生神女の歌」を歌う例あり

つねにさいわいにしてまったくきずなき
 常 福 いわい に し て ま っ た く き ず な き

しゅうしんぢよ、わがかみのははなるなんぢを
 生 う し 神 ん ぢ よ 、 わ が か み の は は な る な ん ぢ を

さいわいなりととのうるはまことにあた
 福 い わ い な り と と の う る は ま こ と に あ た

れり。

ヘルガムよりと尊うとく、セラフムにならびなくさ榮
 ヘ ル ガ ム よ り と 尊 う と く 、 セ ラ フ ム に な ら び な く さ 榮

かえ、みさおをやぶらずしてかみことば
 か え 、 み さ お を や ぶ ら ず し て か み こ と ば



司祭) (黙誦: 聖預言者・前驅・授洗イオアン、光榮にして讚美たる聖使徒、及び爾が

諸聖人の爲に獻ず、神よ、彼等の祈禱に因りて我等を顧み、並に凡そ

永生の復活の望を懷きて寝りし者を記憶して、彼等を爾が顔の光

の照す所に安息せしめ給え、

又爾に禱る、主よ、爾が眞實の言を正しく傳うる正敎者の凡の

主敎品、凡の司祭品、ハリストスに因る輔祭品、及び悉くの神品を

記憶せよ、

又此の靈智なる奉事を、全世界の爲、聖・公・使徒の敎會の爲、潔淨

にして尊く生を度る者の爲、我が國の天皇及び國を司る者の爲に

爾に獻ず、主よ、彼等に泰平の國政を賜え、我等も彼等の平和により、

凡の敬虔と潔淨とを以て、恬静安然にして生を度らんが爲なり、)

司祭) 主よ、殊に敎會を司る尊貴なる我等の全日本の府主教セラフィムを記憶し、

彼を平安・無難・尊貴・壮健・長壽なる者、及び爾が眞實の言を正しく傳う

る者として、爾の聖なる敎會に與え給え、



司祭) (黙誦：主よ、我等が居る所^{しゅ われら お ところ}の此の都邑と凡^{こ まち およそ}の都邑と地方、及び信を以て此の中^{ちほう およ しん もつ こ うち}
 に居る者を記憶せよ、主よ、航海する者、旅行する者、病を患うる者、艱^{お もの きおく しゅ こうかい もの りょこう もの やまい うれ もの かん}
 難に遭う者、擄となりし者、及び彼等の救を記憶せよ、主よ、爾の諸聖^{なん あ もの とりこ もの およ かれら すくい きおく しゅ なんぢ しよせい}
 堂に物を獻り、善業を行う者、及び貧者を記念する者を記憶し、及^{どう もの たてまつ ぜんぎょう おこな もの およ ひんしゃ きねん もの きおく およ}
 び我等衆人に爾の憐れを垂れ給え、)^{われらしゅうじん なんぢ あわれみ た たま}

司祭) 並に我等に、口を一にし心を一にして、爾父と子と聖神の至尊至嚴の名を讚^{ならび われら くち いつ こころ いつ なんぢちち こ せいしん しそんしげん な さん}
 榮讚頌するを賜え、今も何時も世に、^{えいさんしょう たま いま いつ よよ}



司祭) 願くは大なる神、我が救主イイススハリストスの憐れは、爾衆人と偕に在ら^{ねがわ おおい かみ わ きゅうしゅ あわれみ なんぢしゅうじん とも あ}
 んことを、



【 増聯禱 】

司祭) 我等諸聖人を記憶して、復又安和にして主に禱らん、^{われらしよせいじん きおく またまたあんわ しゅ いの}

しゅ あわれ めよ。
主 憐

司祭) ^{すで けん およ せい} 已に獻ぜられ及び^{とうと さいひん ため} 聖にせられし 尊き祭品の爲に^{しゅ いの} 主に禱らん、

しゅ あわれ めよ。
主 憐

司祭) ^{ひと あい わ かみ これ そのせい てんじょう むけい さいだん お ぞくしん けいこう} 人を愛する我が神が、之を其 聖なる天 上の無形の祭壇に置き、屬神の馨香と
^{う われら むく しんみょう おんちよう せいしん たまもの くだ ため いの} して享け、我等に報いて、神 妙の恩 寵と聖神の 賜とを降すが爲に禱らん、

しゅ あわれ めよ。
主 憐

司祭) ^{われら もろもろ うれい いかり あやうき まぬか ため しゅ いの} 我等 諸の憂愁と忿怒と危難とを 免るるが爲に主に禱らん、

しゅ あわれ めよ。
主 憐

司祭) ^{かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも} 神よ、爾の恩 寵を以て、我等を 佑け救い 憐み護れよ、

しゅ あ わ れ め よ 。
主 憐

司祭) この日の純全、成聖、平安、無罪ならんことを主に求む、

しゅ た ま え よ 。
主 賜

司祭) 平安の天使、正しき教導師、吾が靈體の守護者を賜わんことを主に求む

しゅ た ま え よ 。
主 賜

司祭) 我等の罪と過とを宥め赦さんことを主に求む、

しゅ た ま え よ 。
主 賜

司祭) 我等の靈に善にして益ある事、及び世界に平安を賜わんことを主に求む、

しゅ た ま え よ。
主 賜 ま え よ。

司祭) われら いのち よじつ へいあん つうかい もつ おわ しゅ もと
我等の生命の餘日を平安と痛悔とを以て終らんことを主に求む、

しゅ た ま え よ。
主 賜 ま え よ。

司祭) われら いのち おわり かな やまい はぢ へいあん およ
我等の生命の終がハリストティアニンに適い、疾なく、耻なく、平安なること、及び
ハリストスの畏るべき審判に於て宜しき對をなすを賜わんことを求む、

しゅ た ま え よ。
主 賜 ま え よ。

司祭) しん どういつ せいしん たいごう もと われらおのれ みおよ たがい おのおの み もつ ならび
信の同一と聖神の體合とを求めて、我等己の身及び互に各の身を以て、并
に 悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん、

しゅ な ん ぢ に。
主 爾 ん ぢ に。

司祭) (黙誦：ひと あい しゅさい われら わ ことごと いのち のぞみ なんぢ ゆだ ねが
人を愛する主宰よ、我等は我が悉くの生命と望とを爾に委ねて、願

いの せつ もと われら きよ りょうしん もつ なんぢ てんじょう おそ きみつ
い祈り切に求む、我等に、淨き良心を以て、爾が天上の畏るべき機密、

こ せい ぞくしん えん あづか たま こ つみ ゆるし あやまち なだめ
此の聖せられたる屬神の筵に與るを賜いて、此れが罪の赦、過の宥、

せいしん たいごう てんごく しぎょう なんぢ お ゆうかん しんあんあるい ていざい
聖神の體合、天國の嗣業、爾に於ける勇敢となりて、審案或は定罪

とならざるを致させ給え、)

【 天主經 】

しゅさい われら いさみ もつ つみ え あえ なんぢてん かみちち よ い たま
司祭) 主宰よ、我等に勇を以て、罪を獲ずして、敢て爾天の神父を籲びて言うを賜え、

て 天に います われらの ちちよ、

ねがわくはなんぢのなはせいとせられ、なんぢの

くにはきたり、なんぢのむねはてんにおこな

わるるがごとくちにもおこなわれん、わ我

が に ち よ う の か て を こ ん に ち わ れ ら に あ た え た 給
日 用 の 糧 を 今日 我 等 に 與 た 給

ま え 、 わ れ ら に お い め あ る も の を わ 我
我 等 に お 債 め あ る も 者 の を 我

れ ら ゆ る す が ご と く 、 わ れ ら の お い
赦 如 く 、 我 等 の お 債

め を ゆ る し た ま え 、 わ れ ら を い ざ な い
赦 給 え 、 我 等 を 誘 ない

に み ち び か ず 、 な お わ れ ら を き よ う あ 悪
導 ず 、 猶 我 等 を 凶 悪

く よ り す く い た ま え 、
救 給 え 、

司祭) けだしくに けんとう こうえい なんぢちち こせいしん き いま いつ よよ
蓋 國と權能と光榮は 爾 父と子と聖 神に歸す、今も何時も世に、



司祭) ^{しゅうじん へいあん} 衆 人に平安、



司祭) ^{なんぢら こうべ しゅ かが} 爾等の首を主に屈めよ、



司祭) (^{み べ おう そのほか がた のうりよく もつ ばんゆう かくてい そのじれん おお} 黙誦：見る可からざる王、其量り難き能力を以て萬有を畫定し、其慈憐の多
^{もつ ばんぶつ む ゆう しゅ われらなんぢ かんしゃ しゅさい なんぢ} きを以て萬物を無より有となしし主よ、我等爾に感謝す、主宰よ、爾
^{みつか なんぢ こうべ かが もの てん かえり たま けだしけつにく かが あら} 親ら爾に首を屈めし者を天より顧み給え、蓋血肉に屈めしに非ず、
^{すなわちなんぢおそ かみ かが ゆえ しゅさい なんぢ ここ そな もの われ} 乃爾畏るべき神に屈めり、故に主宰よ、爾は此に奠えたる者を、我
^{らしゅうじん ぜん ため かくじん ひつよう おう ひとし わか こうかい もの とも} 等衆人の善の爲に、各人の必要に應じて等く頌ち、航海する者と偕
^{こうかい りょこう もの とも りょこう れいたい いし やまい うれ もの} に航海し、旅行する者と偕に旅行し、靈體の醫師として、病を患うる者
^{いや たま} を醫し給え、)

司祭) ^{なんぢ どくせいし おんちよう じれん じんあい よ なんぢ かれ しせいしぜん いのち} 爾が獨生子の恩寵と慈憐と仁愛とに因りてなり、爾は彼と至聖至善にして生命

ほどこ なんぢ しん とも さんよう いま いつ よよ
 を 施す 爾の神と偕に讃揚せらる、今も何時も世に



司祭) (黙誦: ^{しゅ}主^{われら}イイスス^{かみ}ハリストス^{なんぢ}我等^{せい}の神^{すまい}よ、^{なんぢ}爾^{くに}の聖^{こうえい}なる住所^{ほう}と^{われら}爾^{とも}が國^{おもの}の光^{もの}榮^{もの}の寶^{もの}
 座^ざより^{かえり}眷^{たま}み^{うえ}給^{ちち}え、^{とも}上^ざには父^{ここ}と偕^みに坐^{われら}し、^{とも}此^{おもの}には見^{もの}えずして我等^{おもの}と偕^{もの}に居^{もの}る者^{もの}よ、
 來^{きた}りて我等^{われら}を聖^{せい}にし、^{なんぢ}爾^{けん}の權^{のう}能^ての手^{もつ}を以^{なんぢ}て、^{しじょう}爾^{たい}が至^{しそん}淨^ちの體^ちと至^ち尊^ちの血^ちと
 を我等^{われら}に授^{さづ}け、^{またわれら}又^{もつ}我等^{しゅうじん}を以^{さづ}て衆^{たま}人に授^{たま}け給^{たま}え、)

司祭) ^{つつし}謹^きみて聽^{せい}くべし、^{もの}聖^{せい}なる物^{ひと}は聖^{せい}なる人^{ひと}に、



司祭) (黙誦: ^{かみ}神^{こひつじ}の 羔^さは割^{わか}かれ分^{かれ}たる、^さ彼は割^{ぶんり}かれて分^{つね}離^{くら}せず、^{なが}恒^つに食^つわれて永^{なが}く盡^つき
 ず、^{すなわちう}乃^{もの} 領^{せい}くる者^{せい}を聖^{せい}にす、)

※信徒領聖まで、聖歌指揮者の指示に随って歌うこと。

(奉事規程が指定しているのは『主日領聖詞』、すなわち第148聖詠の第一節を繰り返し歌い、間に2節以下を句としてアンティフォン形式で歌う。若しくは誦經する。

本来は神品領聖と信徒領聖に区別はないので、同じ領聖詞を使う。日本正教会では通年「大パスハ領聖詞」を歌うことが多い。

日本正教会では神品領聖時に『主日領聖詞』に代えて、早課イルモス(其の週の調、又は生神女のカタワシヤ等)、スティヒラ等を歌うことが多いが、これに奉事規程上の根拠はない。

歌えるものがない場合は、聖詠經を誦經しても良い。)

【 領聖詞 第148聖詠 】

て ん よ り し ゅ を ほ め あ げ よ い と た か
天 ん よ り し ゅ を ほ め あ げ よ い と た か
き に か れ を ほ め あ げ よ
き に か れ を ほ め あ げ よ

- 句) そのことごと てんし かれ ほ あ そのことごと ぐん かれ ほ あ
其 悉 くの天使よ、彼を讃め揚げよ、其 悉 くの軍よ、彼を讃め揚げよ。
- 句) ひ つき かれ ほ あ ことごと ひか ほし かれ ほ あ
日と月よ、彼を讃め揚げよ、 悉 くの光る星よ、彼を讃め揚げよ。
- 句) しよてん てん てん うえ みづ かれ ほ あ
諸 天の天と天より上なる水よ、彼を讃め揚げよ。
- 句) しゅ な ほ あ けだしかれい すなわちな めい すなわちつく かれ
主の名を讃め揚ぐべし、 蓋 彼言いたれば、 即 成り、命じたれば、 即 造られたり、彼
これ た よよ いた のり あた これ こ
は之を立てて世世に至らしめ、 則を與えて之を躐えざらしめん。
- 句) ち しゅ ほ あ おおうお ことごと ふち ひ あられ ゆき きり しゅ ことば したが ぼうふう
地より主を讃め揚げよ、大 魚と 悉 くの淵、火と 霰、雪と霧、主の言に従う暴風、
やま ことごと おか くだもの き ことごと はくこうぼく やじゅう もるもろ かちく は もの と
山と 悉 くの陵、 果 の樹と 悉 くの栢香木、野 獣と 諸 の家畜、匍う物と飛
とり ち しよおう ばんみん ぼくはく ち しよゆうし しようねん しよぢよ おきな わらべ しゅ な
ぶ鳥、地の諸王と萬民、牧伯と地の諸有司、少 年と處女、翁と童は、主の名
ほ あ けだただそのな たか あ そのこうえい てんち あまね
を讃め揚ぐべし、 蓋 惟 其名は高く挙げられ、其光 榮は天地に 偏 し。
- 句) かれ そのたみ つの たか そのしよせいじん しよし かれ した たみ さかえ たか
彼は其民の角を高くし、其 諸 聖 人、イスライリの諸子、彼に親しき民の 榮 を高く
せり。

アリル イヤアリル イヤアリ

ル イ ヤ

【 信徒領聖 】

司祭) ^{かみ おそ こころ しん もつ ちか きた} 神を畏るる 心と信とを以て近づき來れ、

しゅのなによりてきたるものはあがめほめら

るしゅはかみなりわれらをとらせり

全員) ^{しゅ われしん か う みと なんぢ じつ せいかつ かみ こ ざいにん すく} 主よ我信じ、且つ承け認めて、爾を實にハリストス生活の神の子、罪人を救うが

^{ため よ きた もの しゅうざいにん うちわれだいいち またしん こ すなわちなんぢ し} 爲に世に來りし者とす、衆罪人の中我第一なり、又信ず、此れは乃爾が至

^{じゅう たい こ すなわちなんぢ しそん ち ゆえ なんぢ いの われ あわれ わ じゅう} 淨の體、此れは乃爾が至尊の血なりと、故に爾に祈る、我を憐み、我が自由

^{じゅう ことば おこない し し おか しょざい ゆる たま ならび} と自由ならずして、言と行にて、知ると知らずして、犯しし諸罪を赦し給え、並

^{われ ていざい なんぢ しじょう きみつ う つみ ゆるし えいせい え いた} に我に定罪なく、爾が至淨なる機密を領けて、罪の赦しと永生とを得るを致させ

^{たま} 給え、アミン。

^{かみ こ いまわれ なんぢ きみつ えん あづか もの い たま けだしわれなんぢ あだ き} 神の子よ、今我を爾が機密の筵に與る者として容れ給え、蓋我爾の仇に機

みつ つ なんぢ ごと せつぶん な すなわちうとう ごと なんぢ う
 密を告げざらん、また 爾 にイウダの如き接吻を爲さざらん、 乃 右盗の如く 爾 を承
 け認めて曰う、主よ、 爾 の國に於て我を記憶せよと、主よ、祈る 爾 の聖なる機密を
 う 領くるは、我が爲に 審案 或 は定罪とならず、すなわち 靈體 の 醫 とならんことを、

【 (大パスハ) 領聖詞 】

※ 全員が領聖し畢り、元の位置に戻るまで繰り返す。



司祭) (黙誦：ハリストスの復活を見て、聖なる主イイス・獨罪なき者を拜むべし、ハ

リストスよ、我等 爾 の十字架を拜み、 爾 の聖なる復活を歌い讃む、 爾

は我等の神なればなり、 爾 の外他の神を知らず、唯 爾 の名を稱う、信者よ、

皆來りてハリストスの聖なる復活を拜むべし、十字架にて 喜 は全世界に

臨めばなり、我等恒に主を讃め揚げて、其復活を崇め歌わん、主は十字架

に釘うたるるを忍びて、死を以て死を 亡ししによる、

新なるイエルサリムよ、光り光れよ、主の光榮 爾 に輝けばなり、シオン

よ、今祝いて樂めよ、 爾 も 潔き生神女よ、 爾 が生みし主の復活を

歡び給え、

嗚呼大にして至聖なるパスハ・ハリストスよ、嗚呼智慧と神の言と能力よ、 爾

が國の暮れざる日に於て、我等に猶親く 爾 を領けさせ給え

主よ、 爾 が至尊の血を以て、 爾 が諸聖人の祈禱に因りて、此に記憶せら

れし者の諸罪を滌い給え、

人を愛する主宰、我が 靈の恩主よ、我等に、此の日に於ても、 爾 が天

上の不死の機密を領けさせ給いしを 爾 に感謝す、我等の途を直くし、我等

しゅうじん なんぢ おそ おそ けんご われら いのち まも われら あゆみ かつ
衆 人を 爾 を畏るるの 畏れに 堅固にし、我等の 生命を 護り、我等の 歩 を固

たま こうえい しょうしんぢょ えいていどうぢょ およ なんぢ しょせいじん いのり
め 給え、光榮なる 生 神女・永貞 童女マリア及び 爾 が諸 聖人の 祈 と

ねがい よ
願 とに 因りて なり、)

※ 全員が元の位置に戻って歌う準備ができてから「ア ril ル イ ヤ」を歌う。

Musical score for the hymn 'A ril Lu I ya'. It consists of two staves: a treble clef staff and a bass clef staff. The melody is simple and repetitive, with the lyrics 'ア ril ル イ ヤ' written below the notes. The key signature has one flat (B-flat).

司祭) かみ なんぢ たみ すく およ なんぢ しぎょう ふく くだ
司祭) 神よ、 爾 の民を 救い、 及び 爾 の 嗣業 に 福を 降せ、

Musical score for the hymn 'われらすでにまことのひかりをみ観てんの'. It consists of two staves: a treble clef staff and a bass clef staff. The melody is simple and repetitive, with the lyrics 'われらすでにまことのひかりをみ観てんの' written below the notes. The key signature has one flat (B-flat).

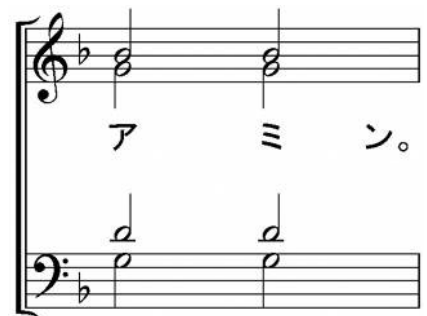
Musical score for the hymn 'せいしんをうけただしきしんをえて'. It consists of two staves: a treble clef staff and a bass clef staff. The melody is simple and repetitive, with the lyrics 'せいしんをうけただしきしんをえて' written below the notes. The key signature has one flat (B-flat).

Musical score for the hymn 'わかれざるせいさんしゃをおがむかれわれ'. It consists of two staves: a treble clef staff and a bass clef staff. The melody is simple and repetitive, with the lyrics 'わかれざるせいさんしゃをおがむかれわれ' written below the notes. The key signature has one flat (B-flat).

Musical score for the hymn 'らをすくいたたまえばなり'. It consists of two staves: a treble clef staff and a bass clef staff. The melody is simple and repetitive, with the lyrics 'らをすくいたたまえばなり' written below the notes. The key signature has one flat (B-flat).

司祭) (黙誦: 神よ、願 くは 爾 は 諸 天 の 上 に 擧げられ、 爾 の 光 榮 は 全 地 を 蔽 わん、 我
 等 の 神 は 恒 に 崇 め 讃 め らる、)

司祭) 今 も 何 時 も 世 世 に、



うくるをゆるせばなり、いのるわれらを
領許 祈 我 等

なんぢのせいせいにまもり、しゅうじつなんぢ
爾 成 聖 護 も り 終 日 爾

のぎをならわしめたまえ、
義 習 給 え

ア リ ル イ ヤ ア リ ル イ ヤ ア リ ル イ ヤ

司祭) ^{つつし た しんせい しじょう ふし いのち ほどこ てんじょう おそ せい}
謹みて立て、神聖・至淨・不死にして生命を施す天上の畏るべきハリストスの聖

^{きみつ う よろ しゅ かんしゃ}
機密を領けて、宜しく主に感謝すべし、

しゅ あわれめよ しゅ あわれめよ
主 憐 め よ 主 憐 め よ

司祭) ^{かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも}
神よ、爾の恩寵を以て我等を助け救い憐み護れよ、

司祭) ^{こ ひ じゅんぜん せいせい へいあん むざい もと われらおのれ みおよ たがい}
此の日の純全・成聖・平安・無罪ならんことを求めて、我等己の身及び互に

^{おのおの み もつ ならび ことごと われら いのち もつ かみ いたく}
各の身を以て、并に悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん、

しゅ な ん ぢ に
主

司祭) ^{けだしなんぢ われら せいせい われら こうえい なんぢちち こ せいしん けん いま いつ よよ}
蓋 爾 は我等の成聖なり、我等光榮を爾 父と子と聖神に獻ず、今も何時も世世
に、

ア ミ ン ア
ミ ン

司祭) ^{へいあん い}
平安にして出づべし、

しゅ の な に よ り て
主 の 名 に 因 り て

司祭) ^{しゅ いの}
主に禱らん、

しゅ あ わ れ め よ
主 あ 憐 わ れ め よ

司祭) ^{なんぢ さんよう もの ふく くだ およ なんぢ たの もの せい しゅ なんぢ たみ すく}
爾 を讃揚する者に福を降し、及び爾 を恃む者を聖にする主よ、爾 の民を救
^{い、 およ なんぢ しぎょう ふく くだ なんぢ きょうかい じゅうまん まも なんぢ どう び}
い、及び爾 の嗣業に福を降し、爾 が教會の充満を守り、爾 が堂の美なるを
^{あい もの せい なんぢ しんせい ちから もつ かれら こうえい およ われらなんぢ たの}
愛する者を聖にせよ、爾 が神聖の力を以て彼等を光榮し、及び我等 爾 を恃む
^{もの のこ なか なんぢ せかい なんぢ しよきょうかい しよしさい わ くに てんのうおよ くに}
者を遺す勿れ、爾 の世界と爾 の諸 教會と諸司祭と、我が國の天皇及び國を

つかさど ものおよ なんぢ しゅうじん へいあん たま けだしおよそ ぜん ほどこし およそ ぜんび
司 する者及び爾の衆人に平安を賜え、蓋凡の善なる施、凡の全備なる

たまもの うえ なんぢこうめい ちち くだ われらこうえい かんしゃ ふくはい なんぢちち
賜は、上より、爾光明の父より降るなり、我等光榮・感謝・伏拜を爾父と

こ せいしん けん いま いつ よよ
子と聖神に獻ず、今も何時も世に、



ね が わ く は し ゅ の な は あ が め ほ め ら れ て い ま よ
願 主 名 崇 讃 今

り よ よ せ に い た ら ん ね が わ く は し ゅ の な は あ 崇
世 世 至 願 主 名 崇

が め ほ め ら れ て い ま よ り よ よ せ に い た ら ん
讃 今

ね が わ く は し ゅ の な は あ が め ほ め ら れ て い ま よ
願 主 名 崇 讃 今



誦經) われいづ ^{とき} 主を讃め揚げん、彼 ^{しゅ} を讃むるは恒に我が口 ^ほ に在り、我が ^あ 靈 ^{かれ} は主 ^ほ を以て誇らん、温 ^{つね} 柔 ^わ なる者 ^{くち} は聞きて ^あ 樂しまん。我 ^わ と偕に ^{たましい} 主 ^{しゅ} を尊 ^め め、偕に ^{あが} 彼の ^な 名 ^を を崇 ^め め讃めん。我 ^ほ 嘗て ^{われ} 主 ^か を尋ね ^{しゅ} しに、彼 ^{たづ} は我 ^{かれ} に聆 ^き き納 ^い れて、我 ^わ が都 ^{すべ} ての ^{あやう} 危 ^{われ} きより ^{まぬか} 我 ^を を免 ^れ れしめ ^{たま} 給 ^め えり。目 ^あ を擧 ^{かれ} げて ^あ 彼 ^お を仰 ^も ぐ者 ^{てら} は照 ^{かれ} されたり、彼等 ^お の ^も 面 ^{てら} は愧 ^は を受 ^お けざらん。此 ^う の ^こ 貧 ^ま しき者 ^づ 呼 ^{しゅ} びしに、主 ^き は聆 ^い き納 ^{これ} れて、之 ^{その} を其 ^{こと} 悉 ^{ごと} くの ^{かん} 艱 ^{なん} 難 ^{すく} より ^{しゅ} 救 ^{つかい} えり。主 ^{しゅ} の ^{つかい} 使 ^{しゅ} は主 ^を を畏 ^お る者 ^{もの} を環 ^{めぐ} り衛 ^{まも} りて、彼等 ^{かれ} を援 ^{たす} く。味 ^あ えよ、主 ^{しゅ} の如何 ^{いか} に仁 ^{じん} 慈 ^じ なる ^み を見 ^{かれ} ん、彼 ^た を特 ^た む人 ^は は福 ^{ひと} なり。凡 ^{さい} そ主 ^{わい} の聖 ^お 人 ^{しゅ} よ、主 ^{せい} を畏 ^{じん} れよ、蓋 ^{しゅ} 彼 ^お を畏 ^そ る者 ^{もの} は乏 ^と しき ^ぼ こと ^な なし。少 ^{わか} き獅 ^し 子 ^し は乏 ^と しく ^ぼ して ^う 餓 ^{ただ} え、唯 ^{しゅ} 主 ^{たづ} を尋 ^{もの} める者 ^{なん} は何 ^{こう} の ^{ふく} 幸 ^か 福 ^か にも ^な 缺 ^な くる ^し なし。

司祭) (黙誦: 親 ^{みづか} ら法 ^{ほう} 律 ^{りつ} と諸 ^{しよ} 預 ^よ 言 ^{げん} 者 ^{しゃ} との ^{じょう} 成 ^{まん} 満 ^{にして}、父 ^{ちち} の ^{てい} 定 ^{せい} 制 ^{こと} を ^{ごと} 悉 ^{じょう} く ^{まん} 成 ^{まん} 満 ^せ し ^{たま} へり。我 ^わ が ^{かみ} 神 ^{つね} よ、常 ^{われ} に ^こ 我 ^こ 等 ^{ころ} の ^よ 心 ^よ を ^こ 喜 ^よ と ^た 樂 ^の とに ^し 成 ^{じょう} 満 ^{まん} せ ^{たま} しめ ^え 給 ^え へ、
今 ^{いま} も ^{いつ} 何 ^よ 時 ^よ も ^よ 世 ^よ 世 ^よ に、)

司祭) 願 ^ね くは ^が 主 ^{しゅ} の ^{こう} 降 ^{ふく} 福 ^は、其 ^{その} 恩 ^{おん} 寵 ^{ちよう} と仁 ^{じん} 愛 ^{あい} とに ^よ 因 ^{つね} りて ^{なん} 常 ^ち に ^ら 爾 ^あ 等 ^い に ^{いま} 在 ^{いつ} らん、今 ^よ も ^よ 何 ^よ 時 ^よ も ^よ 世 ^よ 世 ^よ に、



※ もし永眠者記憶を続けて行う場合はP46【 ^{リテイヤ} 永眠者の爲の熱衷祈祷 】に飛ぶ。

【 通常の終結 】

司祭) ^{かみわれら たのみ} ハリストス神我等の ^{こうえい なんぢ き} 恃よ、^{こうえい なんぢ き} 光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す、

こ 光 う え 榮 い は ち ち と こ と せ い し ん に き 歸 す 、 い ま も

い つ も よ よ 世 世 に ア ミ ン し ゅ あ わ れ め し ゅ あ わ れ

め し ゅ あ わ れ め よ 、 ふ く を く だ せ

司祭) ^{し ふくかつ} 死より復 活せし ^{われら まこと かみ} ハリストス我等の ^{そのしじょう はは こうえい} 眞の神は、^{さんび} 其至 淨なる母、光 榮にして讚美たる

^{せいしと われら せいしんぶ} 聖使徒、我等の ^{だいしゅきょうせいきんこう} 聖 神父コンスタンチノーポリスの大主 教 聖 金口イオアン、

^{こくしょうほうしん わがしよしんぶ} 克 肖 捧 神なる我 ^{およ しょせいじん きとう より われら あわれ たま} 諸 神父、(某) 及び諸 聖 人の祈 禱に因て我等を 憐 み給わん。

^{ぜん} 善にして ^{ひと あい} 人を愛する ^{しゅ} 主なればなり、

ア ミ ン。

【 萬壽詞 】

か 神 み よ わ 我 が 國 に の てん の 皇 う お 及 よ び

く に を つ か さ ど る も の
國

わ れ ら の ふ し ゆ き よ う セ ラ フ ィ ム、 お 及 よ び こ と ご と
我 等 府 主 教

く の せ い き よ う の ハ リ ス テ ィ ア ニ ン ら を い く と せ
正 教 幾 と 歳

に も ま も り た ま え
護 給

(祈禱終了、十字架接吻)

【 幾歳も 】

い 幾 く と 歳 せ も い 幾 く と 歳 せ も い 幾 く

The first system of the musical score consists of two staves. The upper staff is in treble clef with a key signature of one sharp (F#) and a common time signature. The lower staff is in bass clef. The lyrics are written below the notes. The melody is simple and repetitive, with a consistent accompaniment in the bass.

と 歳 せ も い 幾 く と 歳 せ も い 幾 く と 歳 せ も

The second system continues the musical score with two staves. The lyrics are written below the notes. The melody and accompaniment continue from the first system.

い 幾 く と 歳 せ も

The third system is the final one, consisting of two staves. The lyrics are written below the notes. The melody and accompaniment conclude the piece.

【 永眠者の爲の熱衷祈禱 ^{リテイヤ} 】

ひ と を あ い す る き ゆ う せ せ い し ゆ よ し せ し ぎ じん
人 と を 愛 す る 救 う 世 い し 主 よ し 死 し 義 人

の た ま し い と と も に なん ぢ が ぼ く ひ の た ま
の た 霊 し い と と 借 も に なん ぢ が ぼ 僕 く ひ 婢 の た 霊 ま

し い を や す ン ぜ し め て か れ ら を なん ぢ に あ 在
し い を や 安 す ン ぜ し め て か 彼 れ 等 を なん ぢ に あ 在

る ふ く ら く の い の ち に ま も り た ま
る ふ 福 く ら 樂 の い 生 の ち 命 に ま 護 も り た 給 ま

え

し ゆ よ なん ぢ が し よ せ い じん の あん そ く す る と ころ
し 主 よ なん ぢ が し よ 諸 聖 人 の あん そ く す る と 處

に なんぢが ぼくひの たましいを やすんぜ しめ た給
 爾 僕 婢 靈 安

ま え なんぢ ひと りひとを あいする しゆなれば
 爾 獨 人 愛 主

な り

こ う え い は ち ち と こ と せ い しん に き 歸 す
 光 榮 い は ち ち と こ と 聖 い しん に き 歸 す

なんぢ は ぢご く に くだりて つながれし もの の く鎖
 爾 地 獄 に 降 繋 がれし もの の く鎖

さり を と き た る か み な り み づ か ら なんぢ
 釋 神 親 づ か ら 爾

が ぼ く ひ の た ま し い を や す ン ぜ し め た ま
 僕 く 婢 の た ま し い を や す ン ぜ し め た 給

え

い ま も い つ も よ よ に ア ミ ン
 今 も 何 時 も 世 世 に ア ミ ン

ひ と り い さ ぎ よ く き ず な き ど う て い ぢ ゃ た ね な
 獨 り 潔 さ ぎ よ く き ず な き ど う て い ぢ ゃ た 種 な

く し て か み を う み し も の よ か れ ら の た ま
 神 様 を 生 む 者 の よ か れ ら の た ま

し の す く わ れ ン こ と を い の り た ま え
 救 済 の 祈 り 給 いた ま え

【 重聯禱 】

司祭) ^{かみ なんぢ おおい あわれみ より われら あわれ なんぢ いの き い あわれ} 神よ、爾の大なる憐に因て我等を憐めよ、爾に禱る、聆き納れて憐めよ、

司祭) ^{またねむ かみ ぼくひ たましい あんそく ため およ かれら およ じゆう じゆう} 又寝りし神の僕婢(某)の靈の安息の爲、及び彼等に凡そ自由と自由ならざ

^{つみ ゆる ため いの} る罪の赦されんが爲に禱る、

司祭) ^{しゅかみ かれら たましい しょぎじん あんそく ところ い たま いの} 主神が彼等の靈を諸義人の安息する處に入れ給わんことを禱る、

司祭) ^{かれら かみ あわれみ てんごく しょざい ゆるし たま わがし おうおよ} 彼等に神の憐と天國と諸罪の赦とを賜わんことを、ハリストス我死せざる王及

^{かみ ねが} び神に願う、

司祭) ^{しゅ いの} 主に禱らん、



司祭) もろもろ れいしん もろもろ にくたい かみ し ほろ あくま むなし なんぢ せかい いのち
 諸の靈神と諸の肉體との神、死を亡ぼし悪魔を虚くし、爾の世界に生命

たま しゅ なんぢみづか ねむ なんぢ ぼくひ たましい ひか ところ しげ くさば
 を賜いし主よ、爾親ら寝りし爾の僕婢(某)の靈を光る處、茂き草場、

へいあん ところ やまい かなしみ なげき とお ところ あんそく ぜん ひと あい
 平安の處、病と悲と歎との遠ざかる處に安息せしめ、善にして人を愛する

かみ より かれら あるい ことば あるい おこない あるい おもい おか ことごと つみ ゆる
 神なるに因て彼等が或は言、或は行、或は思にて犯しし悉くの罪を赦

たま けだしひとひとり い つみ おこな もの ただなんぢ つみ なんぢ ぎ えいえん
 し給え。蓋人一も生きて罪を行わざる者なし、唯爾は罪なし、爾の義は永遠

ぎ なんぢ ことば しんじつ けだし われら かみ なんぢ ねむ なんぢ ぼくひ
 の義、爾の言は眞實なり。蓋ハリストス我等の神よ、爾は寝りし爾の僕婢

(某)の復活と生命と安息なり。我等光榮を爾と爾の無原の父と至聖至善にし

いのち ほどこ なんぢ しん けん いま いつ よよ
 て生命を施す爾の神とに獻ず、今も何時も世に、



【 永眠者の爲のコンダク 】



を しよ せ い じ ん と と も に や ま い
諸 聖 い 人 と 借 も に 疾 ま い

も か な し み も な げ き も な く た だ お 終
悲 な し み も な げ き も な く た だ お 終

わ り な き い の ち の あ る と ころ に や すん
り な き い の ち の あ る と ころ に や すん

ぜ し め た ま え
し め た ま え

【 終 結 】

司祭) ^{かみわれら たのみ} ハリストス神我等の ^{こうえい なんぢ き} 侍よ、光榮は爾に歸す、^{こうえい なんぢ き} 光榮は爾に歸す、

こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん に き す 、 い ま も
光 榮 い は ち ち と こ と せ い し ん に き す 、 い ま も

い つ も よ よ に ア ミ ン しゅ あ わ れ め しゅ あ わ れ
 何 時 も 世 世 に ア ミ ン 主 憐 れ 主 憐

め しゅ あ わ れ め よ 、 ふ く を く だ せ
 主 憐 れ め よ 、 福 を 降

司祭) ^{し ふくかつ い もの し もの そのぜんのう て たも たま われら まこと}死より復活し、生ける者と死せし者を其全能の手に保ち給うハリストス我等の眞の

^{かみ そのしじょう はは こうえい さんび せいしと こくしょうほうしん わがしよしんぶ}神は、其至浄なる母、光栄にして讚美たる聖使徒、克肖捧神なる我諸神父、

(某) ^{およ しよせいじん きとう より ねむ ぼくひ たましい しよぎじん すまい い}及び諸聖人の祈禱に因て、寝りし僕婢(某)の靈を諸義人の住所に入れ、

^{ふところ やす しよぎじん れつ くわ およ われら あわれ たま ぜん}アブラアムの懐に安んぜしめ、諸義人の列に加え、及び我等を憐み給わん。善に

^{ひと あい しゅ}して人を愛する主なればなり、

ア ミ ン。

司祭) ^{しゅ なんぢ ぼくひ さいわい ねむり えいえん あんそく あた かれら えいえん きおく}主よ、爾の僕婢(某)の福なる寝に永遠の安息を與え、彼等に永遠の記憶

^{な たま}を爲し給え、

え い え ん の き お 憶 く 、 え い え ん の き 憶
 永 い 遠 ん の き お 憶 く 、 遠 い 遠 ん の き 憶

お憶 く、えい えん の き記 お憶 く。

【 萬壽詞 】

か み よ わ が く に の てん の 皇 う お よ び
神 我 國 の 天 皇 及 び

く に を つ か さ ど る も の
國

わ れ ら の ふ し ゆ き よ う セ ラ フ ィ ム、 お よ び こ と ご と
我 等 府 主 教 及 び 悉 ごと

く の せ い き よ う の ハ リ ス テ ィ ア ニ ン ら を い 幾 と せ
正 教 徒 幾 と 歳

に も ま も り た ま え
護 給 え

(祈祷終了、十字架接吻)

りょうせいかんしゃしゅくぶん
【 領 聖 感 謝 祝 文 】

かみ こうえい なんぢ き かみ こうえい なんぢ き かみ こうえい なんぢ き
神や光 榮は 爾 に歸す、神や光 榮は 爾 に歸す、神や光 榮は 爾 に歸す、

【 第一祝文 】 しゅわ かみ なんぢわれざいにん す なおなんぢ せい きみつ あづか
主我が神や、 爾 我 罪 人を棄てずして、 尚 爾 の 聖なる機密に 與 る

もの いた たま なんぢ かんしゃ われた もの なんぢ しじょう てん たまもの う
者と致させ給うを 爾 に感謝す、我堪えざる者に 爾 が至 淨 なる天の 賜 を受く

ゆる たま なんぢ かんしゃ しゅさい ひと あい しゅ われら ため し ふくかつ
るを容し給うを 爾 に感謝す、主 宰・人を愛する主、我等の爲に死して復 活し、

われ たましい からだ おん あた これ せい ため われら こ おそ べ いのち
我が 靈 と 體 とに恩を與え、之を聖にするが爲に、我等に此の恐る可くして生命を

ほどこ きみつ たま もの もと こ きみつ われ たましい からだ いや およそ てき
施す機密を賜いし者や、求む此の機密は、我にも 靈 と 體 とを癒し、凡 の敵

がい か われ こころ め あきら われ たましい ちから へいあん はぢ え しん
の害を驅り、我が 心 の目を 明 かにし、我が 靈 の 力 を平安にし、耻を得ざる信

いつわり あい えいち み なんぢ いましめ まも なんぢ しんせい おんちよう
とし、 偽 なき愛とし、 睿智を充たし、 爾 の 誠 を守らしめ、 爾 が神聖の恩 寵

ま なんぢ くに つ もの え たま われ か ごと こ きみつ
を益し、 爾 の國を嗣がしむる者となるを得せしめ給え、我は此くの如く、是の機密に

なんぢ せいせい まも つね なんぢ おんちよう おも またおの ため せいかつ すなわち
て 爾 の成 聖に護られ、常に 爾 の恩 寵 を思い、復己が爲に生活せず、 乃

なんぢわ しゅさいおよ おんしゅ ため せいかつ もつ えいせい のぞみ いた こ よ はな
爾 我が主 宰 及び 恩 主の爲に生活し、以て永生の 望 を懐き、此の世を離れて、

えいえん いこい か しゅく もの た こえ およ なんぢ かんばせ い つく びぜん み
永 遠の息、彼の 祝 する者の絶えざる聲、及び 爾 が 顔 の言い盡されぬ美善を見

もの かぎ たのしみ ところ いた けだし わ かみ なんぢ なんぢ あい
る者の限りなき 樂 の處に至らん、蓋 ハリストス我が神や、 爾 は 爾 を愛する

もの まこと のぞみ い つく たのしみ およ ぞう う もの なんぢ よよ ほ うた
者の 眞 の 望 と言い盡されぬ 樂 なり、凡そ造を受けし者は 爾 を世世に讃め歌う、

「アミン」

【第二祝文 聖大ワシリイの原文】 しゅさい かみ ばんせい おう ばんぶつ ぞうせいしゃ
主 宰ハリストス神、 萬世の王、 萬物の造成者や、

およ われ たま ところ しょぜん かついのち ほどこ しじょう なんぢ きみつ う たま
凡そ我に賜いし 所 の諸善、且生命を 施す至 淨 なる 爾 の機密を領けさせ給い

なんぢ かんしゃ またなんぢ いの ぜん え ひと あい しゅ われ なんぢ おおい した
しを 爾 に感謝す、又 爾 に祈る、善にして人を愛する主や、我を 爾 が 庇 の下

なんぢ つばさ かげ まも われ いき た いた まで いさぎよ りょうしん もつ
に、 爾 が 翼 の蔭に護り、我に呼吸の絶えんとするに至る迄、 潔 き良 心を以て、

とうぜん なんぢ せいたいせいけつ う もつ つみ ゆるし えいせい う いた たま けだし
當然に 爾 の聖 體 聖 血を領け、以て罪の 赦 と永生とを得るを致させ給え、 蓋

なんぢ いのち かけて せいせい いづみ しょぜん たま しゅ われらなんぢ ちち せいしん こうえい
爾 は生命の糧、成 聖の 泉、諸善を賜う主なり、我等 爾 と父と聖 神とに光 榮

けん いま いつ よよ
を獻ず、今も何時も世世に、「アミン」

【 第三祝文 聖シメヨン「メタフラスト」の原詩 】 わ ぞうせいしゅ あまん おのれ み かけて
我が造成主、甘じて己の身を糧と

われ あた ひ ふとうしゃ や もの もと われ や なか すなわちわ ひやくたいしよせつしん
して我に與え、火にして不當者を焚く者や、求む我を焚く母れ、乃 吾が百體諸節心

ぶく い わ しょざい いばら や たましい きよ おもい せい すじ ほね かた ごかん
腹に入り、吾が諸罪の棘を焚き、靈を淨め、思を聖にし、筋と骨とを固め、五官を

あきら わ ぜんしん なんぢ おそ おそれ くぎ つね われ おお われ たも われ たましい
明かにし、吾が全身を、爾を畏るる畏に釘うち、常に我を庇い、我を保ち、我を靈

がい もろもろ おこない ことば まも われ きよ われ あら われ かざ われ おさ われ
を害する諸の行と言とより護り、我を淨め、我を滌い、我を飾り、我を治め、我

ひら われ てら わ またつみ すまい ひとりなんぢ せいしん すまい あらわ およそ
を啓き、我を照し、我が復罪の住所たらずして、獨爾が聖神の住所たるを顯し、凡

あくしゃおよそ よく われせいたい い よ なんぢ いえ もの に ひ に
の悪者凡の愆は、我聖體の入るに依りて爾の家となりし者より逃ぐるること、火より逃ぐ

ごと たま われそのてんたつしゃ もろもろ せいじゃ しょひん しんし なんぢ ぜんく
るが如くならしめ給え、我其轉達者として、諸の聖者、諸品の神使、爾の前驅、

ちえ しと およ なんぢ むてんしじょう はは なんぢ すす じれん しゅわ かれら
智慧なる使徒、及び爾が無玷至淨の母を爾に進む、慈憐の主我がハリストスや、彼等の

きとう い なんぢ えきしゃ ひかり こ たま けだしひとりしぜん しゅ なんぢ われら たましい
祈禱を容れて、爾の役者を光の子となし給え、蓋獨至善の主や、爾は我等の靈

せいせい こうみょう われらみなかみ しゅさい よろ ところ ごと ひび こうえい なんぢ けん
の成聖と光明なり、我等皆神と主宰に宜しき所の如く、日に光榮を爾に獻ず、

【 第四祝文 】 しゅ われら かみ ねがは なんぢ せいたい わ ため
主イイスハリストス我等の神や、願くは爾の聖體は、我が爲に

えいせい なんぢ そんけつ つみ ゆるし ねがわ こ かんしゃ まつり わ ため きえつ
永生となり、爾の尊血は、罪の赦とならん、願くは此の感謝の祭は、我が爲に喜悦

そうけん あんらく またおそ べ なんぢ さいど こうりん とき われざいにん なんぢ こうえい
と壯健と安樂とならん、又畏る可き爾が再度の降臨の時、我罪人に、爾が光榮の

みぎ た え たま なんぢ しじょう はは しょせいじん きとう よ
右に立つを得せしめ給え、爾が至淨の母と諸聖人との祈禱に依りてなり、

【 第五祝文 至聖生神女に捧ぐ 】 しせい ちょさい しょうしんぢよ わ くら たましい
至聖なる女宰・生神女、我が味みたる靈の

ひかり わ たのみ おおい かくれが なぐさめ よろこび なんぢ われた もの なんぢ こ しじょう
光、吾が憑恃と悒鬱と避所と慰藉と歡喜や、爾が我堪えざる者に、爾の子の至淨の

たいしそん ち う もの え たま なんぢ かんしゃ なおいの まこと ひかり う
體至尊の血を領くる者となるを得せしめ給いしを爾に感謝す、猶祈る、眞の光を生み

もの わ ころろ れいもく あきらか ふし いづみ う もの われつみ ころ もの い
し者や、吾が心の靈目を明にせよ、不死の泉を生みし者や、我罪に殺されたる者を生

たま じれん かみ じあい はは われ あわれ わ ころろ しょうかん ひつう わ おもい
かし給え、慈憐なる神の慈愛の母や、我を憐み、吾が心に傷感と悲痛、吾が思に

けんそん わ とりこ いねん よびかへし たま われ いき た いた つみ え
謙遜、吾が虜となりし意念に呼還を賜い、我に呼吸の絶えんとするに至るまで、罪を獲

しじょう きみつ せいせい う たましい からだ いやし う いた ならび われ
ずして、至淨なる機密の成聖を受けて、靈と體との醫を得るを致し、並に我に

つうかい うけとめ なみだ あた しょうがいにんぢ かしょうさんえい たま けだしなんぢ よよ さん
痛悔と承認との涙を與えて、生涯爾を歌頌讚榮せしめ給え、蓋爾は世世に讚

び こうえい み こうむ
美と光榮とを満ち被る、「アミン」

2025年1月21日 一部改訂